賢治は殺生をいかに考えたか

貞光　威

この稿は、生物が生きてゆくためには他の生物を殺して食わねばならないこと、すなわち「殺生」ということを宮沢賢治がどのように考えたかについて考察するものである。まずそれを賢治の童話作品などから探り、つづいて彼がどのような信仰を持つに至ったかをたどったあとで、彼の肉食についての態度を生活の上から見て、信仰となつながりを考察したい。殺生を罪業とする考えにたどりついた賢治は、必ずしも完全にそれを貫いたわけではないにしても菜食を行なったので、菜食の問題についても考察することにする。

第一節　殺生の問題を扱った賢治の童話

最初に賢治の童話作品の中から生物が他を殺して食って生きることを罪とする罪業意識のうかがわれるものを見てみよう。

それのとくに顕著なものとしては、「よだかの星」「銀河鉄道の夜」の中の「サソリの話」「フランドン農学校の豚」「注文の多い料理店」「ビヂテリアン大祭」などが挙げられる。

まず、「よだかの星」について見てみると、この作品は用いられた原稿用紙などから大正一〇年（一九二一）ごろの執筆と考えられる。

よだかは生まれつき醜いために、鷹はもちろん、ほかのヒバリやメジロなどの小鳥たちからも馬鹿にされている。最初は、自分が何も悪いことをしていないのにこうして馬鹿にされ嫌われるのを嘆くばかりであったが、ある日、鷹が自分とよだかとが同類に見られることを嫌って、「鷹」という名前を勝手に使うな、「市蔵」と改名しろ、改名したことを鳥たちの家に一軒一軒、披露して回らないと殺

すぞ、と脅迫される。

そんな時、自分が羽虫や甲虫を飲み込みながら生きていることに気づく。そのところを、長くなるが引用すると、賢治は次のように書いている。なお、賢治の童話は、そのほとんどが生前には発表されなかったことや、表記には割合に無頓着だったことなどから、同じ作品の中でも、「空」と書いたり「そら」と書いたり、表記が不統一であることがしばしば見られるが、統一しないで彼の表記のままにしておく。

よだかは口を大きくひらいて、羽をまっすぐに張って、まるで矢のやうにそらをよこぎりました。小さな羽虫が幾匹もその咽喉にはひりました。

からだが地につくかつかないうちに、よだかはひらりとまたそらへはねあがりました。もう雲は鼠色になり、向ふの山には山焼けの火がまっ赤です。

よだかが思ひきって飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたやうに思はれます。一匹の甲虫が、よだかの咽喉にはひって、ひどくもがきました。よだかはすぐにそれを呑みこみましたが、その時何だかせなかがぞっとしたやうに思ひました。

雲はもうまっくろく、東の方だけ山やけの火が赤くうつって、恐ろしいやうです。よだかはむねがつかへたやうに思ひながら、又そらへのぼりました。

また一匹の甲虫が、よだかののどに、はひりました。そしてまるでよだかの咽喉をひっかいてばたばたしました。よだかはそれを無理にのみこんでしまひましたが、その時、急に胸がどきっとして、よだかは大声をあげて泣き出しました。泣きながらぐるぐるぐるぐる空をめぐったのです。

（ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕が鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだらう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向ふにいってしまはう。）

山焼けの火は、だんだん水のやうに流れてひろがり、雲も赤く燃えてゐるやうです。

ここにはよだかが羽虫や甲虫を殺して食うことの悲しみ、苦しみが三回くりかえして書かれ、しかも最後には「泣きながらぐるぐるぐるぐる空をめぐった」と書かれており、その反省の悲しみは回を追って強調されている。「山焼け」というのは山火事のことであろうが、その描写も三度くりかえされている。しかも、「山焼けの火

がまっ赤です。」「山やけの火が赤くうつって、恐ろしいやうです。」「山やけの火はだんだん水のやうにひろがり、雲も赤く燃えてゐるやうです。」と、これも回を追って不気味さの描写が強められている。この山火事の描写はよだかの感じた殺生ということについての罪業意識を象徴的に示したものと見られる。

やがて、よだかは鷹をはじめとする鳥たちの軽蔑や迫害のつらさや、自分自身が羽虫や甲虫を飲み込んで他の生命を奪って生きる弱肉強食の食物連鎖の罪業から離脱しようとして、太陽や星の世界に救いを求めて飛び出す。太陽や星たちにそれを冷たく拒否されたよだかは、絶望的になりながらも必死に空へ羽ばたきつづけて、ついに力尽きて意識を失いそうになったとき、突然よだかは自分のからだが燐のような美しい光を放っているのを知り、星になったというところで「よだかの星」は終わっている。

このように見てくると、「よだかの星」の主題は、前半部では、羽虫や甲虫がよだかに殺されるが、よだかも鷹に殺されるように、この世は殺し殺されの弱肉強食の世界であるという悲しみ、苦しみが扱われ、後半では、たとえ他から嫌われさげずまれようとも、勇猛心を起こして必死に努力をつづければ必ず願いはかなえられるのだということを訴えていると考えられる。一つの作品に二つの主題があるという作品は、普通には余り見られないが、先に見たように、あれだけ弱肉強食、殺生の苦しみを訴えているのを無視することは適当ではないと考えられる。

この「よだかの星」とたいへんよく似た話が「銀河鉄道の夜」の中に出てくる「サソリの話」である。その話のあらすじは、

バロドラの野原に住んでいた一匹のサソリは毎日、虫などを捕らえて平気で食っていたが、ある日、イタチに食われそうになった。イタチに抑えられそうになって懸命に逃げるとき井戸に落ちてしまった。もうどうしても井戸から上がれないと知ったとき、サソリは、「ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない。そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもたうたうこんなになってしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかったろう。そしたらいたちも一日生きのびたらうに。どうか神さま、私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてず、どうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。」といってお祈りをした。そしたら、サソリは

自分の体が真っ赤な美しい火になって燃えて、夜の闇を照らしているのを見た。

この話で、サソリはそれまで何の抵抗もなく平気で生き物を食べていたが、自分が食べられる側になったときに他を殺して生きる罪を深く意識するのである。

次には、他の生き物を殺して生きる人間の姿を、豚の場合について半ば喜劇的に描いた「フランドン農学校の豚」の場合について考察してみよう。

この作品の舞台となっているフランドン（フランダンと書かれたところもある）は賢治のこしらえた架空の地名だが、イギリスのバークシャー種の豚の主産地、ファリンドンFaringdonや、ベルギー西部からフランス北端にかけての、英語でフランダースと呼ばれる毛織物産地フランドルFlanndreから発想した地名らしい。また、この作品は、初期形と、後に大幅に手入れがなされて、内容においても文体においても変わり、別の作品の趣を呈している改訂形とがあるが、ここでは便宜の上から改訂形によることにする。

この作品は、冒頭に何枚かの草稿があったらしいが、紛失している。「フランドン農学校の豚」という題名も賢治の弟の清六氏がつけたものである。

この童話は、化学を習った農学校の一年生の生徒が豚の消化力に感心し、生きた触媒にたとえて、「無機体では白金」「有機体では豚」と、白金と並べて称えたのを聞いた豚が、自分は六〇万円の値打ちがあると喜び、自信を持つところから始まる。

しかし、それから二、三日たって、投げ込まれた餌の中に混じっていた、豚の毛を使った歯ブラシを見て、自分のからだ中の毛がザラッザラッとして、嫌な気分になって敷き藁の中に頭を埋めて寝てしまう。

ところが豚はずんずん肥って、畜産の先生が目方を測り、助手にもっと肥らせよと注意した。豚はそれを聞いて、ひどく嫌な気持になる。教師と助手の「北極の空のやうな眼」を思い出してたまらなくなり、前の柵をむちゃくちゃに鼻でつつく。

そのうち、王様から一つの法令が布告される。それは「家畜撲殺同意調印法」といい、家畜を殺そうとする者は、その家畜から殺されることを了承するという、ハンコを押した死亡承諾書を受け取ることを要するというものであった。

やがて、豚のところへ校長が承諾のハンコを取りにやってくる。しかし、滅入ってあんまり陰気な顔をする豚を見た校長は、その日はあきらめて引き上げる。

しかし、また校長がやってくる。「気分はいゝかい。」「たべ物は美味しいかい。」などと優しい言葉をかけたあとで、

死亡承諾書

私儀永々御恩顧の次第に有之候儘御都合により、何時にても死亡仕るべく候。

年　月　日

フランドン畜舎内　ヨークシャイヤ

フランドン農学校長殿

という文書に前肢の爪印を押すように強く求める。お人良しの豚もこの時は必死に頑張って、押印を拒否しぬく。

しかし、数日して再びやってきた校長にすごい剣幕で怒鳴られてすっかりおびえた豚は、ついに死亡承諾書に押印してしまう。その心労のために豚は「神経性栄養不良」となり、肉が落ちてしまうが、それを見て教師は強制肥育に踏み切る。豚の肢を縛った上で、鋼の管をギシギシと歯の間にねじ込み、それに管を通して咽喉の奥に差し込み、管の端のじょうごから餌を胃に送り込む。豚は悲鳴を上げつづけるが、それでも豚は肥ってゆく。

それから七日目、生徒の見守る中で、豚は教師に鉄槌をあびせられ、助手に小刀で咽喉を刺された。

以上が「フランドン農学校の豚」のあらすじであるが、生物を殺すなかれという賢治の主張を殺される者の立場から描いていることがはっきりとわかる作品である。作者が「さあそれからあとのことならば、もう私は知らないのだ。」とか、「一体この物語は、あんまり哀れ過ぎるのだ。もうこのあとはやめにしやう。」などと作者が直接に顔を出してきて物を言うのは童話作品としては異例で、これは生き物の殺されるのを憐れむ賢治自身の激しい感情が抑えきれないところからこういう形になったと考えられる。

この作品が作られた時期は、初期形、改訂形ともに不明であるが、農学校が描かれているところから見て、花巻農学校の教師時代か、農学校を退職して間もない頃の執筆であると推察される。農学校には畜産の授業があって、豚も飼われていた。賢治が在職していたころは、畜産の授業は校長の畠山栄一郎が担当した。畠山校長は太っていたのでピッグのニックネームがあり、収穫祭の会食用に校長ピッグが学校飼育のピッグに一撃を加えたとき、一同が爆笑したというエピソードが『宮沢賢治全集』第一四巻にある年譜の大正一四年（一九二五）のところに見える。

なお、賢治の短歌には、

A　ほふらるゝ
　馬のはなしをしてありぬ
　明き五月の病室にして（大正三年作）

B　岩なべて
　にぶきさまにて
　夕もやの
　ながれを含む
　屠殺場の崖（大正五年作）

という作品が見られる。

大正三年（一九一四）三月に盛岡中学校を卒業した賢治は、四月に盛岡市岩手病院に入院して肥厚性鼻炎の手術を受けた。ところが手術後に高熱がつづいて発疹チフスの疑いが起こり、退院が遅れて五月まで病院にいた。Aの短歌はその頃のものである。

Bの短歌を作った大正五年の四月には賢治は盛岡高等農林学校の二年生になっている。

この二つの短歌に出てくる屠殺場は、岩手郡米内村（現、盛岡市）にあった下米内屠殺場であろうと考えられる。大正七年二月二三日付、父、宮澤政次郎宛の書簡にも、「先日も屠殺場に参りて見申し候」とある。

その時の印象を同年五月一九日付、保阪嘉内宛の書簡では、「又屠殺場の紅く染まった床の上を豚が引きずられて全身あかく血がつきました。」と言っている。

賢治は「フランドン農学校の豚」を執筆する何年も前からこのように生物を殺すことに関心をいだきつづけていて、それがこの童話になったのであろう。

「注文の多い料理店」という童話は大正一三年（一九二四）一二月に発行された童話集の題名にもなっている作品で、その三番目に収録されている。童話集の目次には、

注文の多い料理店　（一九二一・一一・一〇）　四三

と、題名の下にカッコ付きで執筆完成の日付と思われる数字が記されている。一九二一年（大正一〇）には、一月二三日、家人に告げず上京し、国柱会に赴き、本郷に間借りをして文信社という小さな印刷所で働きながら国柱会で奉仕活動を行ない、そのかたわら童話の創作を活発に行なっていた。八月に妹のトシが病気だという電報を受け取って花巻に帰り、一二月には稗貫農学校の教諭となった。

東京から帰ったのち、教師となる直前に花巻で書いた作品ということになる。この作品のあらすじは、

都会の若い紳士二人が山奥へ猟に来て、獲物もなく疲れて腹を空かせたときに、突然「山猫軒」という西洋料理店を見つける。店に入ると長い廊下には次々と扉があって、それぞれに「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません。」「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします。」「当軒は注文の多い料理店ですからそこはご承知ください。」などと書かれている。二人は、田舎だがなかなか繁盛しているのだと言って進んで行く。注文はさらにつづく。髪を整え靴の泥を落とせ、鉄砲と弾とを置け、このあたりまでは礼儀のやかましい店だと我慢していた二人も、金属類、ことに尖ったものは外せ、首や顔や手足にクリームを塗れ、からだ中に塩をもみこめと注文されては、店から客への注文で、自分たちが料理されようとしているのだと気づいてガタガタふるえて悲鳴を上げる。そのとき、二匹の死んだと思っていた猟犬がやってきて、それに助けられた。辺りを見ると、上着や靴や財布は枝にぶら下がったり、根元に散らばったりしていた。山猫に化かされて、今にも食われようとしていたのであった。恐怖のあまり紙くずのようになった顔だけは東京に帰っても元どおりにはならなかった。

というようになっており、「注文」の意味の逆転によって人間が山猫に食べられる側に回るというブラック・ユーモアになっている。

冒頭の、東京から来た二人の紳士が登場するところでは、「なんでも構はないから、早くタンタアーンとやって見たいもんだね。」「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞いまうしたら、ずゐぶん痛快だらうね。くるくるまはって、それからどたっと倒れるだらうねえ。」と言い、連れてきた猟犬が泡を吹いても、「じつにぼくは、二千四百円の損害だ。」「僕は二千八百円の損害だ。」と悔しがるだけである。このように、鹿や犬の命のことなどまったく考えない男たちの酷薄な心を鮮やかに描いている。その男たちが山猫にやられて、そのときの恐怖から、一ぺん紙くずのようになった顔だけは、東京に帰っても、湯に入っても、もうもとのとおりにはならなかった、という結末が痛快である。

この作品には猟という遊びのために生き物の生命を奪うことに対する批判が強く出ている。童話集『注文の多い料理店』のチラシ広告に賢治は、

二人の青年紳士が猟に出て路に迷ひ『注文の多い料理店』に入りその途方もない経営者から却って注文されてゐた話。糧に乏しい村のこどもらが文明と放恣な階級とに対する止むに止まれ

ない反感です。

と、この作品について説明しているが、これには服装や持物ばかりを気にして、生き物の命などを気にしない近代の風潮に対する東北人としての賢治の思いが強く出ている。

次には「ビヂテリアン大祭」について見てみたい。この作品の初めの部分に同じ原稿用紙の上に書き入れたり、あるいは別の用紙を挿入して、大幅に手入れしたものが「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」である。「ビヂテリアン大祭」が、三箇所においてそれぞれ数枚ずつの原稿がなくなっているにもかかわらず四〇〇字詰め原稿用紙にして九三枚の長さを持ち、ほぼ完成しているのに対し、「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」は一三枚半くらいで、前者の冒頭に当たる部分だけで切れていて未完のままに終わっているので、ここではほぼ完成の域に達している「ビヂテリアン大祭」について考察することにしたい。

一九三一年というと昭和六年で、この年の二月に賢治は東北砕石工場の技師となり、石灰の発送、広告文の起草、宣伝販売に当たった。九月に石灰の重い見本を持って上京する途中、列車の中で発熱し、二一日には宿屋の床に病臥しながら、父母宛の遺書、弟妹宛の別れの言葉を書いている。

同九月二八日に花巻に帰った彼は、病床生活をつづけたが、一一月三日に手帳に「雨ニモマケズ」の詩を書いた。「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」は、この年かその翌年くらいに書かれたものと思われる。ちなみに、賢治は昭和八年（一九三七）九月二一日に結核のために永眠しているから彼の最晩年の作品ということになる。「ビヂテリアン大祭」の草稿の上に書きこみが行なわれて、それが「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」となっているところから見ると、「大祭」は「見聞録」からそれほどさかのぼる時期の作品ではないと考えられる。

「ビヂテリアン大祭」は、

私は昨年九月四日、ニュウファウンドランド島の小さな山村、ヒルティで行はれた、ビヂテリアン大祭に、日本の信者一同を代表して列席して参りました。

と書き出されている。これは恐らく、一九〇八年(明治四一)にパリで世界で最初に開かれた「世界ベジタリアン大会」が下敷きになっていると考えられる。(「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」では会場が花巻温泉になっている。) 舞台になっているニューファウンドランド島は、カナダの東海岸、大西洋側、セントローレン

ス川湾口にある島の名である。会場をパリでなく、この島に設定したのは、反対のビラを配ったり、会場で菜食主義について反対する議論を闘わしたりするためにこの会へシカゴ畜産組合から数名の男たちが派遣されて来たことになっているから、畜産業が隆盛であったシカゴに近い場所としてこの島を選んだのであろう。

「ビヂテリアン大祭」の次第は、

挙祭挨拶(挙祭＝この会の長老であるカトリックの司祭)
論難反駁
祭歌合唱
祈祷
閉式挨拶
会食
会員紹介
余興

となっていて、二番目の「論難反駁」では、菜食主義に反対する人―ここでは「異教徒」と書かれている―と信者の会員との討論が延々と展開されている。それが実に長く、全体の六割以上に及んでいる。そこに展開されている異教徒たちの菜食に対する論難と、それに対する会員の反駁を発言の順に要約すると次のようである。

一、植物性食品は蛋白質にしても脂肪にしても、動物性食品に比べて消化率がいちじるしく低い。植物性食品は動物性食品に比べて一般においしくない。

〔反駁〕それは、植物性食品が動物性食品に比して消化率がいくぶん劣るということであり、菜食に慣れてくると消化が良くなる。食事の喜びは肉食ばかりにあるのではない。清らかで透明な愉快と安静とが菜食にはある。

二、動物は衝動、本能によって生きているから、かわいそうなどと考えずに、単なる器械と考えて、自由に去勢をしたり肥育をしたりすれば良い。

〔反駁〕動物も本能や衝動によって生きたがっている。それを殺すのはいけないことだ。飼い主を喪った犬が墓から離れないで食物をとらずに餓死した例や、馬が何年も飼い主を覚えていて、たまたま逢ったときに涙を流した例もある。本能だけで生きているのではない。

三、人類の食物の半分は動物性で半分は植物性である。その半分の動物性食物を利用しなかったら食物が不足して人類は亡びてしまう。

〔反駁〕牛や馬や羊は燕麦や牧草を食べる。人間が自分の食べる穀物や野菜のかわりに家畜の食べる牧草を作っているが、牧草地は広大な面積が必要で、植物性食物の方が多くの人を養える。

四、動物と植物との間は連続しており確たる境界がない。動物、植物というのは人間が勝手に設けた分類にすぎない。生き物を殺すのがかわいそうというならば、植物を殺して食うのも止めるべきである。

〔反駁〕いくら連続していても、動物と植物のの両端ではだいぶ違う。草を刈るのと牛を殺すのとでは煩悶の度合いが違う。

五、比較解剖学の立場から見ると、人間には植物を擦り砕くために臼歯があり、肉を裂くために犬歯がある。人類には混食が一番適しているのだ。

〔反駁〕人類は混食が自然だからといって、それで菜食はいけないとは言えない。自然だというのは良いときも悪いときもある。畑で自然なことは草がいっぱい茂ることだが、それでは作物が草に負けてしまって実らない。

六、イワシならクジラに食われるか人間に食われるかだし、ツグミならタカにやられるか人間にやられるかだ。イワシやツグミは人間に気の毒がられながら食われた方が良いと言うだろう。

また、キャベツ一個を育てるためには百匹の青虫を殺さねばならない。

〔反駁〕どうせ何かに殺されるからといっても、人間が殺して良いという理由にはならない。菜食の場合も生き物を犠牲にするが、肉食の場合よりたくさん殺すことはない。できるだけ浪費せずに、犠牲を少なくすることが大切なのだ。

七、神学の立場から見ると、主の恵みである美しき世界で、パンをたべ、羊毛や木綿を着、セロリーや蕪を食べ、豚や鮭を食べるのは神の摂理で善である。

〔反駁〕あるがままであるのが善であるという、その論理からすると、私が怒って博士を殴っても善で、いくら殴っても良いということになり、ビジテリアンが動物を食べないことも神の摂理で善になる。

八、菜食主義者の約二割は仏教徒であるが、仏教の開祖の釈迦は女性の捧げた牛乳を飲んだ。また、病んでいた釈迦は供養された豚肉を食べたために、痛めていた胃腸をさらに悪くして寂滅した。

〔反駁〕釈迦が最後に受けた供養は豚肉ではなく、きのこの一種である。豚肉とするのはサンスクリット語を翻訳した際の間違いである。また、釈迦は「涅槃経」に、「今より汝等仏弟子、

肉を食うことを許さず。」と言っている。

また、キリスト教の精神は一言で言えば愛であり、仏教の精神は慈悲である。愛や慈悲の心で周りの生き物と親子兄弟のように生きてゆくのが望ましい生き方であろう。

右の八つ目の議論で、反駁に立ったのが日本から参加した、「私」で、これは宮沢賢治の分身と考えてよいであろう。熱心なベジタリアンたちの主張、そのうちでも、とくに仏教の立場に立った「私」の主張を聞いて、満場が狂喜し、菜食に反対するためにシカゴからこの大会にやって来た、いわゆる異教徒たちも、数名の者全員がベジタリアンに転向改宗したというところで終わっている。会の式次第から見ると序のところで話が終わってしまう点とか、わざわざこの大会に反対するために畜産組合から派遣されてきていた者が皆ベジタリアンに改宗してしまうという点とか、物語としては、不自然と言わざるをえないところがあるが、賢治と思われる「私」が最後に登場して菜食主義について滔々と論じている点といい、畜産組合から派遣されてきていた者が皆、めでたくベジタリアンに改宗してしまう点といい、「雨ニモマケズ」の詩で「一日ニ玄米四合ト　味噌と少シノ野菜ヲタベ」とうたって菜食を理想とした賢治の思い入れのはっきりと出た作品である。

この作品の大半を占める「論難反駁」の部分で展開される議論は、菜食主義の問題点を的確にえぐり出したものということができ、賢治が菜食ということをいかに真剣に考えていたかを知る良い手がかりを提供している。

以上のように、賢治が殺生ということについて真正面から取り組んだ作品である「よだかの星」「銀河鉄道の夜」の中の「サソリの話」「フランドン農学校の豚」「注文の多い料理店」「ビヂテリアン大祭」の五つについて見てきたが、次に、殺生を主題としたというほどではないが、この問題に触れている作品として、「雁の童子」「二十六夜」「なめとこ山の熊」の三つについて考察してゆきたい。

「雁の童子」は、使った原稿用紙などから大正一二年（一九二三）に書かれたと推定される作品である。

大正一〇年一二月から稗貫農学校（後に花巻農学校と改称）の教師となっていた賢治は童話や詩の制作も活発に行なっていた。同一二年一月に上京して、本郷龍岡町に下宿していた弟の清六を訪ね、童話の原稿を「婦人画報」および月刊絵本「コドモノクニ」を発行していた東京社に持っていくように頼む。清六は言われたように東京社に持っていったが、編集者から自分の社の雑誌には向かないか

らと掲載を断られるということがあった。

なお、妹のトシが同一一年一一月に二四歳で結核のために死亡し、妹思いの賢治はひどい衝撃を受けている。

「雁の童子」のあらすじは次のようである。

シルクロードのタクラマカン砂漠、流沙の泉のほとりで昼食をとろうとしていた「私」は、やって来た巡礼の老人から次のような「雁の童子」の話を聞く。

沙車という所に、写経三昧で静かに暮らすスリヤケイという人がいた。ある日の明け方、鉄砲を持ったいとこといっしょに野原を歩いていた。殺生を止めるようにいさめたが、いとこは聞き入れないで空を飛ぶ七羽の雁を撃った。弾はいずれも命中して、雁は泣き叫びながら落ちてきたが、驚いたことには近づくにつれて人間の姿に変わっていた。

落ちてきた七人の中の長老は拝むようにして、この子を引き取って育ててほしいとスリヤに頼んだ。天上の世界で罪を犯し、雁の姿をして暮らしていたが、時が満ちて帰ることになった。しかし、この子だけは、その期間が終わっていないので天に帰れない。この子はあなたと縁のある子だからこの童子の世話を頼む、と言い終えるや否や、その老人は燃え尽きてしまった。

地上にとどまりスリヤの世話を受けることになった童子は「雁の童子」と呼ばれた。この子は食卓に出された蜜で煮た鮒をどうしても食べなかった。馬市で売られて、母馬から引き離されて連れられて行く馬を見て強く泣いた。

童子は一二歳になったとき、すこし離れた都にある塾に入った。スリヤの妻が一心に機を織って塾料や小遣いをこしらえた。しかし、冬が近づいたころ、童子はにわかに帰ってきてしまった。おかあさんといっしょに働きたいという。スリヤと妻は、勉強が大切だからと無理に帰らせた。

翌年の夏、沙車の町のはずれの砂の中から沙車大寺の跡が発掘され、壁に描かれた三人の童子の絵が見つかった。その絵の中の一人はまるで生きているようだと評判になった。そんなある日、スリヤは都へ出て、塾の師匠の許しを得て、童子と二人で町を歩いた。郊外に行って、発掘された寺の遺蹟の壁に描かれた三人の童子の絵を見たとき、スリヤはそれが童子とあまりによく似ているのにドキリとし、遠くの空から何かがかぶさったように感じた。童子は笑ったまま倒れかかった。童子がスリヤの腕の中で夢のようにつぶやくには、「おじいさんが迎えをよこしたのです。私は前世ではあなたの子でした。壁の絵はあなたが前世で私を描いたのです。」それだけ言うと童子は天に昇っていった。

この話を聞いた「私」は、丁寧に老人に礼を言い、老人も礼を返した。そしてそれぞれが別々の方向へ進んで行った。

童話「雁の童子」のあらすじの説明が長くなったが、この話は仏教の輪廻転生の考えに基づいて書かれている。あらゆる生き物は、車輪が回転してきわまりがないように、生きかわり死にかわりしている。前世でスリヤと童子とは親子であり、スリヤは童子の絵を沙車大寺の壁に描いたことがあった。童子は次の世で天の童子に生まれ変わったのに対し、スリヤは再び人に生まれて写経に明け暮れている。スリヤが天の童子の顔に見覚えがあったのは、二人が前世で親子であったためであるとしている。

この作品の主題について考えてみると、次のように言えようか。人生は輪廻という大きな旅の中の一くぎりにすぎない。今、誰かと会っているのも、これは仏の計らいによるものである。今、人と別れても、仏の力によって、いつか、どこかで会えるかも知れない。ひたすらに仏の示された道を進み、思いやりや慈悲の心をもって無上菩提に至るように努めなければならない。

この童話に仏教の思想が著しく、とくに輪廻転生の考えが強く出ているのは、これを書いた前の年の一一月に、愛していた妹トシが世を去ったことが関係していると考えられる。賢治は、今まで妹といっしょに暮らせたのも、また天上の世界に召されていったのも、共に仏の計らい、導きであったと考えたらしい。

この童話でも、殺生が問題にされている箇所があちこちに見られる。

初めの方で、ある明け方にスリヤがいとこと野原を歩いていて、いとこに、

お前はずゐぶんむごいやつだ。お前の傷めたり殺したりするものが、一体どんなものだかわかってゐるか。どんなものでもいのちは悲しいものだぞ。

と言うと、いとこは

さうかもしれないよ。けれどもさうでないかもしれない。さうだとすればおれは一層おもしろいのだ。まあそんな下らない話はやめろ。そんなことは昔の坊主どもの言ふこった。見ろ、向ふを雁が行くだらう。おれは仕止めて見せる。

と言って雁の列に鉄砲を撃つ。このいとこは、賢治の作品には珍しくニヒルというか、無情な男に描かれている。

それに対して、童子は殺生をどうしても見過ごせない子供として書かれている。食卓に出された蜜で煮た鮒をどうしても食べなかったところは、

ある日、スリヤさまは童子と食卓にお座りになりました。食べ物の中に、蜜で煮た二つの鮒がございました。スリヤさまは、一つをスリヤさまの前に置かれ、一つを童子にお与へなされました。

「食べたくないよ、おっかさん。」童子が申されました。

「おいしいのだよ。どれ、箸をお貸し。」

スリヤの奥様は童子の箸をとって、魚を小さく砕きながら、

「さあおあがり、おいしいよ。」と勧められます。童子は母さまの魚を砕く間、ぢっとその横顔を見てゐられましたが、俄かに胸が変な具合に迫って来て、気の毒なやうな悲しいやうな、何とも堪らなくなりました。くるっと立って鉄砲玉のやうに外へ走って出られました。

と描かれている。

この「雁の童子」では、生きるために他の命を殺して食うという問題を輪廻転生の考えにもとづいて描いている。生き物は輪廻転生をたえずくり返していて、前世で何であったかもわからないとなると、食べようとするその生き物と自分とは前世で親子や兄弟などであったかも知れないということになって、命の重さがさらに増すことになるのである。この、童子が食卓に出された鮒を食べないで泣いた話には、馬市で母馬から引き離されて連れられて行く馬を見て強く泣いた話と共に、ほかの生き物も人間も輪廻転生一つの仮の姿にすぎないと見る仏教的な賢治の考えがはっきりと示されている。

次には「二十六夜」の場合を考察することにしよう。この作品は、その書きかけの原稿用紙の裏が童話「フランドン農学校の豚」の原稿用紙に転用されていることを考えると、「フランドン農学校の豚」からそんなに隔たらぬ、すこし前に執筆されたものと考えられる。

題名の「二十六夜」というのは仏教の「二十六夜待ち」という念仏講の行事を下敷きにしている。これは陰暦の正月と七月の二十六夜の夜半に月の出るのを待って拝む宗教行事で、月光の中に阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩の三尊が姿をあらわすと言い伝えられていた。

このあらすじは、旧暦の六月二四日の夜、北上川のほとりの森で、フクロウたちが松の枝に集まって、フクロウの大僧正から「梟鵄救護章」という経典の説教を聴いている。このお経は、他の生き物ば

かりでなく、親まで食って命をつなぐという悪業を持った鳥類を輪廻の世界から解き放ち、悟りの世界に導こうとするお経だということになっている。なお、フクロウの大僧正が説く、この「梟鵄救護章」という経典は法華経を思わせる経文の文体で書かれてはいるが、実在の経典ではなく、賢治の創作である。

フクロウの大僧正の「梟鵄救護章」についての法話は、第一夜の分を要約すると次のようである。

インドのある家の軒先に一匹の雀が住んでいた。ある年、非常な飢饉が襲って、米もとれねば木の実もならず、草さえ枯れた。雀が宿を借りていた家でも、子どもはまだ六歳で、母親は食う物をどこからも得られず、親子は今にも餓死しようとしていた。

それを見た雀は、日頃の恩を報ずるのは今と、はるか遠くまで食べ物を探しに行った。一念が天に届いたか、林の中に一〇個の木の実を見つけることができ、一〇たび木の実を運んだ。雀はその実の重さに眼もくらみ、何度も地に落ちたけれども、自分が木の実をついばむことなく、すべてを親子の上に落とした。しかし、子どもはそれをたべて元気になったけれども、母親はそれを口にせず、いよいよ死にそうな様子であった。雀は自分の体をその母に食わせようと堅く身を縮め息を殺して梁から床に落ちた。すると、念願がかなって親子がそれを食べて命をつなぐことができた。

身を捨てて母と子を救った雀は、仏の計らいによって次第に法力を得て疾翔大力施身大菩薩となった。

以上が大僧正の説教のあらましである。

次の、六月二五日の晩、説教はまだ始まらず、フクロウたちは皆が興奮している。それは、前の晩に、大僧正の説法をろくに聴こうとしないほかの子どもたちとは違って、たいへん静かに説教を聴いていた、おとなしい穂吉という子どものフクロウが、人間の子どもにつかまってしまったというのであった。穂吉ら三羽の兄弟が明け方、野原に出掛けていて、朝日が出たのでまぶしさに枝に止まって目をつぶっていたところ、草刈りに来た子どもにつかまえられたという。大僧正は穂吉の父親に「殺さないでいるところを見ると、タニシか何かで飼うつもりだろうから、噛みついたりして逆らうな。」と言った。

翌、二六日の晩、穂吉は説教の席に来ていた。しかし、穂吉は脚が折れていて、痛みに耐えかねているのだった。フクロウに飽きた子どもが穂吉を逃がすときにポキッと脚をわざと折ったのだった。その痛みを必死にこらえて穂吉は大僧正の説法が聴きたいとやってきたのだった。説法で大僧正は「恨みの心は修羅となる。けっして

他をうらむでない。」と言う。

そのうちに不思議な黄金の船のような二六夜の月が東の空に昇った。その船のへさきから紫の雲が噴き出して、金色の三体の仏がだんだんこちらに近づいてきた。その中の施身大力菩薩がいよいよ大きくなったかと思うと良い香が立ち込めたが、それっきり仏の姿は見えなくなり、気づいてみると穂吉はかすかに笑ったまま、息がなくなっていた。穂吉は仏の世界に迎えられたのだった。

この作品は、法華経を信仰する賢治が、来迎という浄土教的な色彩を帯びた世界を描いた点で珍しいが、野鼠などを捕らえて食うフクロウを登場させて、しかも「梟鵄救護章」という経典を賢治がわざわざこしらえて施身大力菩薩が、親まで食って命をつなぐという悪業を持った鳥を輪廻の世界から解放し、悟りの世界に導いたとするところに、賢治の殺生を罪とする思いがはっきりとうかがえる。

最後に「なめとこ山の熊」について考察することにしたい。この作品も生前には発表されていないが、昭和二年（一九二七）の執筆と推定される。

賢治は前年の三月にに花巻農学校を退職し、羅須地人協会を設立、独居自炊の生活をしながら、教え子二〇名ほどと農作業をするかたわら文化活動も行なう一種の「新しき村」的な活動をした。付近の農家に対して肥料設計などの農業指導にも精を出し、そんな生活を歌った詩も多く作っている。

この作品のあらすじは次のようである。

なめとこ山には熊がたくさんいた。主人公の淵沢小十郎は熊撃ちの名人で、その山の熊を片っ端から撃った。小十郎は熊が好きだったが、生きてゆくためには熊を撃たぬわけにはいかぬのだった。熊も小十郎を憎んではいなかった。

ある年の早春、山で道に迷った小十郎は、谷の向こうを見つめている母熊と子熊を見つけた。その親子の熊を見たとき、彼には熊に後光がさすように思われて、無邪気な子熊と優しい母熊の会話に思わず引きこまれた。

大きな熊でも平気でやっつける小十郎だけれども、捕った熊の皮や胆を町に売りに行くときはまったくみじめだった。店の主人の手管に乗せられて、ひどく買い叩かれてもありがたがっていた。

ある夏、谷をさかのぼって行った小十郎は、不意に大きな熊と出会った。小十郎に撃たれそうになった熊は、し残した仕事があるから殺すのをもう二年待ってくれと言う。その熊は約束を守って、二年後に家の前に体を横たえていた。

一月のある日、小十郎は何か気が進まない気持で熊撃ちに出かけた。山の頂きで休んでいたとき、突然、大きな熊に襲われて小十郎は殺された。

それから三日目の晩、栗の木と白い雪の山々に囲まれた平らな所にたくさんの熊が小十郎を囲んで環になってイスラム教徒の祈るときのようにじっとひれ伏したままいつまでも動かなかった。思いなしか死んだ小十郎の顔は生きているように冴え冴えして、何か笑っているように見えた。

以上が「なめとこ山の熊」のあらすじであるが、この作品では主人公の小十郎は熊の話す言葉だけでなく、心もわかることになっている。熊の親子の話しているのを聞いて子熊の無邪気さに心を奪われる。また殺そうとした熊にし残した仕事があることを聞いてじっと立って考え込んでしまうし、約束したことはきちんと守って、二年たったらちゃんと死んでいるのを見て思わず拝まないではいられない。ここでは人間も熊も同じ位置で描かれている。仏教の輪廻転生の思想に立てば、いま人間であっても前世で熊であったかも知れないし、来世で熊に生まれるかも知れない。人であったり熊であったりするのは輪廻の中の一つの仮の姿にすぎない。その点で熊も人間と兄弟のようなものであると賢治は考えたのであろう。

熊も人間と同じように親子の絆に結ばれていて小十郎の心をうった。人間との約束も守って死んだ熊には拝みたいような気持になった。それにもかかわらず、その熊を小十郎は殺さねば生きてゆけない。熊を殺したときに小十郎は、

熊。おれはてまへを憎くてころしたのでねえんだぞ。おれも商売ならてめへを射たなけあならねえ。ほかの罪のねえ仕事をしてえんだが、畑はなし木はお上のものにきまったし、里へ出ても誰も相手にしねえ。仕方なしに猟師なんぞしてるんだ。てめへも熊に生まれたが因果ならおれもこんな商売が因果だ。やい、この次には熊なんぞに生れなよ。

と猟師に生まれた運命を嘆く。主人公の小十郎は山男、マタギなのであると考えられる。小十郎が熊を殺すことに深い罪の意識を持っていることを知っているから、熊は自分たちを殺す猟師である小十郎を憎まないだけでなく、好きだというのであろう。小十郎の死から三日目の晩、星空のもと、雪の中に彼の死を悼むように熊たちがひれ伏し、小十郎が殺生の業から解放されてホッとしたかのように笑って見える場面で終わる「なめとこ山の熊」は、悲しくしかも美しく殺生について描いている。

生物が生きてゆくためには他の生物を殺して食わねばならないこと、すなわち「殺生」ということを賢治がどう考えたかについて、彼の作品の中から、罪業意識がはっきりと出ているものとして、「よだかの星」「銀河鉄道の夜」の中の「サソリの話」「フランドン農学校の豚」「注文の多い料理店」「ビヂテリアン大祭」を、また殺生を主題としたというほどではないが、この問題に触れている作品として、「雁の童子」「二十六夜」「なめとこ山の熊」について見てきた。

賢治は童話を書き始めた頃から晩年まで、このようにくり返して殺生の問題を作品に取り上げた。

第二節　賢治の信仰

彼がどのような機縁から第一節で見たように殺生の問題を考えつづけたのかを考えるために、この節では彼の仏教信仰、とくに法華経、日蓮宗への信仰について考察したい。

賢治の信仰について考える場合、まず考えられるのは、賢治の育った家庭の環境であろう。たとえば、彼の年譜の多くには、父、政次郎の姉のヤギが賢治に「正信偈」や「白骨の御文章」を子守唄のように聞かせ、賢治も唱えたことを記している。「正信偈」は親鸞の『教行信証文類』の末尾にある「正信念仏偈」のことで、浄土真宗の朝夕の勤行で和讃とともに読誦する七言一二〇句の偈文（韻文形式のお経）であり、「白骨の御文章」は、朝に紅顔を誇っていても夕べには白骨と化する人間のはかなさ、老少不定を説いた蓮如の消息風の法語である。ヤギは明治二六年（一八九三）に宮沢直太郎との結婚に敗れ、実家である政次郎の家にもどっていて、賢治に「正信偈」や「白骨の御文章」を子守唄のように聞かせ、賢治も唱えたということは確かなようである。しかし、このように大人が「正信偈」や「白骨の御文章」を聞かせたり、子どもがそれを聞き覚えて唱えたりすることは、信仰の篤い家では当時としてはそれほどに珍しいことではなかったと思われる。

それよりも注目されることは、政次郎が明治三一年（一八九八）、二四歳の時に町の有志と「我信念講話」という研修会をを設立していることである。この会は、初めの二年は、そのころ新しくできた盛岡高等農林学校の教授を招いて農業についての話を聞いたが、参加者に農民がいなかったことなどから宗教的なものに内容を変えて、「夏期仏教講習会」と呼ぶようになった。講師は村上専修、近角常観、釈宗演、齋藤唯信、桜山肇山、多田鼎、暁烏敏などで、東京などから一流の宗教家、宗教学者を招いていることが注目される。

この会は、毎年、夏に花巻の町から一五キロほど北西に行った所にある大沢温泉で四、五日間、講師といっしょに泊まり込みの合宿を行なった。また、この講習会に参加できなかった婦人などのために「四恩会」と称する説教の催しも行なった。

この「夏期仏教講習会」は明治末年まで続いたようであるが、講師の招請、世話、費用の負担などにおいて政次郎は果たすところが大きかったようである。

賢治は明治三九年（一九〇六）には花巻の花城尋常小学校の四年生になっていたが、八月に開かれた第九回「夏期仏教講習会」に参加している。講師は暁烏敏であった。その時に撮った記念写真が残っている。森荘已池の『宮沢賢治の肖像』（昭和四九・一〇　津軽書房）によると、会は九時から始まって午後にも及び、夜には座談会が催されたという。

翌明治四〇年の第一〇回「夏期仏教講習会」にも賢治は出席したものと推定される。講師はこの年も暁烏敏であった。森荘已池の『宮沢賢治の肖像』の中で、賢治が父の政次郎に言い付けられて夜は暁烏敏の隣の部屋で寝ることになっていて、侍童のような役をしていたことを、大沢温泉でマッサージ師をしていた勝見淑子が伝えている。

賢治の育った宮沢家は、父の政次郎や叔母のヤギなど信仰のなみなみならず篤い家庭であった。

明治四二年（一九〇九）の四月に賢治は岩手県立盛岡中学校に入学し、寄宿舎に入っているが、二年生になった翌明治四三年一一月には、学校で日蓮宗の管長であった本多日生の講話「日蓮と訓育」を聴いている。

三年生になった明治四四年の八月には、盛岡市北山の順教寺で開かれた「盛岡仏教夏期講習会」に出席して、島地大等（しまじだいとう）の法話を聞いたようである。賢治の「文語詩篇」のノートに「島地大等　白百合ノ花」のメモが見られる。

翌四五年八月に順教寺で開かれた「盛岡仏教夏期講習会」に出席したことは確実で、八月一日から七日まで、朝の五時から七時まで行なわれた講習会で、島地大等ほかの法話を聴いている。この講習会は明治四一年（一九〇八）から大正一三年（一九二四）までに一五回開催され、この会では「仏教大意」「起信論」「正信偈」「歎異鈔」などが講ぜられたが、大正一三年の年末に順教寺が炎上して開催が途絶えた。

順教寺の住職、島地大等は明治八年（一八七五）に新潟県に生まれ、明治三二年（一八九九）に京都西本願寺大学林高等科を卒業し、同三五年に盛岡市北山の順教寺の島地黙雷の法嗣として入籍、やがて住職となった。東京の仏教大学、東洋大学の講師となった後、大

正八年（一九一九）には東京帝国大学文学部講師となり、同一五年にはインド哲学第三講座を創設し、華厳・天台教学を講じた。著書に『仏教大綱』『天台教学史』『日本仏教学史』などがある。

賢治が法華経信仰を深めるきっかけとなった『漢和対照　妙法蓮華経』は大正三年（一九一四）に明治書院から刊行されたが、これは島地大等の編著である。

大等は明治三五年から三六年にかけて、大谷光瑞の探検隊の随員として、セイロン・インド・ネパールの仏蹟調査に参加している。賢治の童話「インドラの網」「雁の童子」などに見られるインドや西域方面に対する関心や知識は、順教寺で開かれた「盛岡仏教夏期講習会」での島地大等の説教などから得た可能性が高い。

大正元年（一九一二）一一月三日付の父、政次郎宛書簡で賢治は、

小生はすでに道を得候。歎異鈔の第一頁を以て小生の全信仰と致し候。もし尽くを小生のものとなし得ずとするも八分迄は得会（ママ）申し候。

と述べている。

大正二年三月には盛岡中学校の寄宿舎で舎監の排斥運動が起こり、四、五年生が全員退寮処分となった。このために賢治は北山の清養院（曹洞宗）に下宿したが、五月には徳玄寺（浄土真宗）に移っている。また、九月には曹洞宗報恩寺の住職、尾崎文英について参禅し、青々と剃って坊主頭になったと伝えられている。

大正三年三月に賢治は盛岡中学校を卒業したが、上級学校への進学を許されず、家業である質屋を継ぐことに深い嫌悪を覚え、悶々とした日々を送った。

四月には盛岡市の岩手病院に入院して肥厚性鼻炎の手術を受けたが、手術後に高熱がつづいて発疹チフスの疑いが起こり、その手当てを受け、五月まで病院にいた。家業への嫌悪はますます高まり、進学の希望がさらに強まって神経衰弱に陥ったので、父は賢治の前途を憂えて、九月になって賢治の希望する盛岡高等農林学校の受験を許した。島地大等編『漢和対照　妙法蓮華経』に賢治が接したのはこの頃である。

この本は明治書院から発行されたが、これが政次郎の法友、県下浄法寺村の商人、高橋勘太郎から九月ごろに政次郎宛に送られてきた。賢治はこれを読んで異常な感動を受けて、生涯の信仰をここに定めることになる。生まれ変わったように元気になって、店番もいとわず、受験勉強に励むようになったという。

その結果、翌大正四年四月に盛岡高等農林学校農学科第二部に首席で入学した。この年の八月にも、一日から七日まで順教寺の夏期

仏教講演会に友人の河上和吉を誘って参加し、朝の五時から七時まで島地大等の歎異鈔の法話を聴いている。八時からは学校の実習が始まるのでなかなか忙しかったという。

大正五年四月に賢治が順教寺に島地大等を訪ねていることが、四月四日付の高橋秀松宛の書簡からわかる。おそらく『漢和対照　妙法蓮華経』を読んでの感想を述べ、理解できなかった箇所などについて問いただしたことであろう。

盛岡高等農林学校時代に賢治の法華経信仰は急速に深まっていった。

読売新聞盛岡支局編『啄木　賢治　光太郎』（昭和五一・六）によると、寄宿舎で同室であった中嶋信は、この頃の賢治について、

一年の二学期だったか北寮で同室になったことがあります。（中略）オレは体が弱いから夜は一〇時以降は勉強はしないというのが口ぐせで、試験の時も早寝早起きを守っていました。そして試験場には三〇分前から出かけてゆくんです。私は一体何をしているんだろうと思い、一度あとをつけて行ったことがあるんですが、そっとドアを開けて見ると、宮沢さんはストーブのそばに立って合掌し、静かにお経を唱えていました。私の方を見てニッコリ。けれどもそのままお経を続けて、今ではあの姿がたとえようもなく尊いものに思われるんです。

と言っている。この回想ではこの時に唱えていたお経が浄土真宗のお経であったか、日蓮宗のそれであったかはわからないが、川原仁左衛門編著の『宮沢賢治とその周辺』（昭和四七・五）で、やはり寮に入っていた潮田豊は「賢治の思い出」という題で、

大正五年の早春、毎朝北寮二階から力強く読経の声が流れた。室長は、宮沢さんが法華経をあげているのだといわれた。

と書いている。これから見ると、試験場の教室でも賢治は法華経を唱えていたと考えられる。

大正五年四月には賢治が室長をしている寮の部屋に新入生の保阪嘉内が入った。保阪は中学校時代から短歌を作り、文芸や宗教の方面にも関心が深く、賢治と同じような方面に関心を持っていたところから二人は深い親交を結んだ。

ところが同七年三月、保阪は三年生への進級を前に、同人誌「アザリア」に載せた文章が過激思想として退学処分を受けて、郷里である山梨県の田舎に帰った。しかし、保阪が盛岡高等農林学校を去った後も書簡の往復は頻繁につづいた。「保阪さん、みんなと一諸（ママ）で

なくても仕方がありません。どうか諸共に私共丈でも暫らくの間は静かに深く無上の法を得る為に一心に旅をして行かうではありませんか。」「南無妙法蓮華経　南無妙法蓮華経　どうかどうか保阪さんすぐに唱へて下さいとは願へないかも知れません　先づあの赤い経巻は一切衆生の帰趣である事を幾分なりとも御信じ下され本気に一品でも御読み下さい」（大正七年三月二〇日と推定の嘉内宛書簡）と賢治は嘉内に一途に入信を勧めた。「赤い経巻」というのは島地大等編『漢和対照　妙法蓮華経』で、高橋勘太郎から父に贈られ、賢治が読んで深く感動して入信するきっかけとなったその本である。

これに対して、嘉内は信仰だけでは農村の人々を救えないと考えた。保阪は協同組合を基盤にした模範的な農村を築くことを思い描いていたようである。三年後の大正一〇年に二人は再会を果たすが、烈しい論争した後でついに訣別した。

ジョバンニとカムパネルラとの悲しい別れが描かれている『銀河鉄道の夜』は妹トシとの別れが底流になっていると見るむきが多いが、菅原千恵子『宮沢賢治の青春―“ただ一人の友”保阪嘉内をめぐって―』（平成六・八　宝島社）は、賢治と嘉内との別れが『銀河鉄道の夜』のモチーフになっていると考えているのが注目される。

大正七年（一九一八）三月に盛岡高等農林学校を卒業した賢治は、地質、土壌、肥料研究のために研究生として残り、同九年五月に修了する。同七年一二月、日本女子大学校家政学部三年生であった妹のトシが東京帝国大学医学部附属病院の小石川分院に入院したために母とともに上京し、翌年の三月まで滞在して看病に当たった。この上京中に賢治は上野桜木町の国柱会館に赴いて田中智学の講演を聴いていることが父や保阪嘉内に宛てた書簡からわかる。

大正八年、九年の頃、研究生を修了した賢治は、何を職業にするかという問題で再び深い悩みに陥る。同八年四月一一日付の成瀬金太郎宛書簡では、「私は暗い生活をしてゐます。うすくらがりのなかで遥かに青空をのぞみ、飛びたちもがきかなしんでゐます。」と記し、四月に書いたらしい保阪嘉内宛書簡では、「私のうちは古着屋でまた私は終日の労働に堪えないようなみじめなからだな為にあなたの様に潔い大気を呼吸して居りません。」と質屋の店番の身を悲しんでいる。この年の秋に書いたらしい嘉内宛の書簡に至っては、

きさまは農業の学校を出て金を貸し、古着をうるのかと云ふ人もあるでせう。これより仕方がない。仕方がないのですから仕方がないのです。烈しい世間の唯中で私の恩を受けた人たちをかばう為に私はまっ先に死んでみせる。

とあって、彼の煩悶は頂点に達した観がある。

このような煩悶の中で、賢治は日蓮への帰依を深める。大正九年七月二二日付の嘉内宛書簡には、

今日私ハ改メテコノ願ヲ九識心王大菩薩即チ世界唯一ノ大導師日蓮大上人ノ御前ニ捧ゲ奉リ新ニ大上人ノ御命ニ従ッテ起居決シテ御違背申シアゲナイコトヲ祈リマス。サテコノ悦ビコノ心ノ安ラカサハ申シヤウモアリマセン。

とあって、賢治の信仰がいよいよ固まった重要な告白として注目される。同じく嘉内宛の同年一二月二日付の書簡には、

今度私は国柱会に入会致しました。即ち最早私の身命は日蓮聖人の御物です。従って今や私は田中智学先生の御命令の中に丈あるのです。謹んで此事を御知らせ致し、恭しくあなたの御帰正を祈ります。

と書いている。国柱会に入るには、最初は研究員となり、やがて信行員に進むのが普通の順序であったが、彼はいきなり信行員を申し出て、それを許された。彼は以前から書籍、新聞、パンフレットなどを取り寄せて勉強していたのが認められたのであろう。その後の彼の信仰はいよいよ深まり、寒修行などといって町内を「南無妙法蓮華経　南無妙法蓮華経」とお題目を唱えて歩いたと関登久也の『賢治随聞』（昭和四五・二　角川書店）は記している。この頃、賢治は父にも日蓮宗への改宗を迫り、対立がつづいた。

このような状況の中で賢治は大正一〇年（一九二一）一月二三日夕刻、家人にも告げずに出京する。午後五時一二分花巻発の列車に乗って東京に向かったのである。関登久也宛の一月三〇日付の書簡で賢治は、

何としても最早出るより仕方ない。あしたにしやうか明後日にしやうかとと二十三日の暮方店の火鉢で一人考へて居りました。その時頭の上の棚から御書が二冊共ばったり背中に落ちました。さあ今だ。今夜だ。時計を見たら四時半です。汽車は五時十二分です。すぐに台所へ行って手を洗ひ御本尊を箱に納め奉り御書と一所に包み洋傘を一本持って急いで店から出ました。

と、その時の模様を報じている。

東京に着いた賢治は、国柱会館を訪れて、理事であった高知尾智耀（たかちおちよう）に会い、どんな仕事でもするからここで指導をしてくれと頼むが、無断で家を出て来たと聞いて、どこか親戚でもあればそこに落ち着

くようにと勧めて、賢治の国柱会館に入って奉仕したいとの願いを断った。そこで彼は本郷の東大赤門前の文信社という大学の講義録を謄写印刷して売る小さな印刷所に勤めながら国柱会で奉仕活動をすることになった。高知尾が賢治の思い出を語ったものによると、賢治は毎日のように奉仕活動を行なっていたらしい。そして高知尾から、「詩歌文学を得意とするというのであるから、その詩歌文学の上に純粋の信仰がにじみ出るようでなければならぬ」と、文芸によって大乗仏教を広めるように勧められたのが契機となって、賢治は童話の創作に猛然ととりかかる。『雨ニモマケズ手帳』には、「高知尾師ノ奨メニヨリ法華文学ノ創作」と記されている。

この年四月、父の政次郎が上京し、賢治を伴って伊勢神宮、比叡山延暦寺、奈良の法隆寺、興福寺などに参拝の五泊の旅をした。政次郎としては、古い寺社を訪ねて日本の伝統に触れて賢治の法華経と国柱会にとらわれすぎる点に気づかせ、あわせて親子の感情の融和を図り、賢治を帰郷させることを期待したのであろうが、賢治は旅行の後も考えを変えず東京にとどまり、花巻に帰る父を上野駅に見送った。

また、この年の八月、「トシビョウキスグカエレ」という電報を受け取った賢治は、急遽、帰宅の用意をし、高知尾智耀に挨拶をして書きためた原稿のいっぱいに入った大トランクを持って帰宅した。この辺の事情は、弟の清六が書いた『兄のトランク』（昭和六二・九　筑摩書房）に詳しい。また、賢治の短編「革トランク」にはこの時の様子が生かされている。賢治が大トランク一杯の原稿を持って帰宅したことは、国柱会館における高知尾の、自分の得意とする文芸の方面で法華経の信仰を広めよという助言に励まされて、彼がいかに本気になって取り組んだかを物語っている。

以上、賢治が法華経を読んで感動し、日蓮の教えに帰依し、とくに国柱会に入って活動するまでの経過を長々と探ってきたが、賢治の信仰は世を去るまで変わらなかったようである。

大正一〇年（一九二一）八月、トシが病気という電報を受けとって東京から帰郷した賢治は、その年の一二月に郡立稗貫農学校（同一二年四月に県立に移管し花巻農学校となる）の教諭となり、同一五年三月まで在職、退職した後は羅須地人協会を設立して、農村青年の指導に当たるかたわら、農民に対して稲作指導を行なった。さらに賢治は、昭和六年（一九三一）からは県下東磐井郡松川駅前にあった東北砕石工場の技師として働き、同八年九月二一日に結核のために亡くなるのであるが、彼の信仰は最期まで深まることはあっても、弱まることはなかったと考えられる。

晩年に所持していた『雨ニモマケズ手帳』には昭和六年九月二八

日の日付で次のような無題の詩が記されている。

快楽もほしからず
名もほしからず
いまはたゞ
下賤の廃躯を
法華経に捧げ奉りて
一塵をも点じ
許されては
父母の下僕となりて
その億千の恩に酬へ得ん（ママ）
病苦必死のねがひ
この外になし

この詩を読むと彼の願いが法華経の教えを広めることにあったことがはっきりとわかる。

この年の一一月三日には有名な「雨ニモマケズ」の詩が書かれるのであるが、この詩の後には、見開きになったページに、

南無無辺行菩薩
南無上行菩薩
南無多宝如来
南無妙法蓮華経
南無釈迦牟尼仏
南無浄行菩薩
南無安立行菩薩

のように法華経を真中にしてその左右に三体ずつの仏の名が記されている。これはここだけでなく、この手帳のあちこちにも記されている。このことは、「雨ニモマケズ」の詩や「快楽もほしからず」の詩が祈りの言葉であったことを示すものといえよう。

彼の絶筆は、世を去る前日、昭和八年九月二〇日に半紙に書いた短歌二首であったが、その中の一首は

いたつきのゆゑにもくちんいのちなり
みのりに棄てばうれしからまし

というものであった。この歌は、「病気のために今にも朽ちてしまうような自分の命であるが、この私の命が仏法をすこしでも弘めるために役立つのであったらどんなにうれしいことであろう。」というような意味である。

賢治は死の直前に父の政次郎に遺言して、国訳の法蓮華経を千部作って「私の一生の仕事はこのお経をあなたのお手許に届け、そしてあなたが仏さまの心に触れてあなたが一番よい、正しい道にはいられますように」という言葉とともに知己に届けることを頼んでから間もなく息を引き取ったと伝えられている。

このように見てくると、賢治の晩年は強い法華経信仰で貫かれていたと言えよう。

第三節　ベジタリアンとしての宮沢賢治

これまで、第一節では賢治の作品「よだかの星」「銀河鉄道の夜」の中の「サソリの話」「フランドン農学校の豚」「注文の多い料理店」「ビヂテリアン大祭」「雁の童子」「二十六夜」「なめとこ山の熊」について、彼がいかに生きて行くために他の生き物を殺して食う殺生ということを避けたいと考えていたかについて見てきた。そして第二節では彼がなみなみでない仏教信者で、とくに法華経信仰に貫かれていたことを見てきた。

彼が篤く信仰した仏教では殺生ということを十戒の第一にあげて重視している。また、日頃、読誦した「法華経」にも次のように述べられている。それを『大乗仏典』（明治書院　昭和四九・四）から紀野一義の訳によって引用すると、「安楽行品（あんらくぎょうほん）　第十四」には、「猪・羊・鶏・犬などを飼って屠殺する者たちや漁する者たちなどの、悪業をなす者に近づいてはならない。」とあり、「普賢菩薩勧発品（かんぼっぽん）　第二十八」には、「このような人（注、法華経を受持し、読誦し、正しく記憶し、修習し、書写する者）は屠殺者、豚や羊や鶏や犬を飼う者・猟師・女性に売春させる者に近づかないであろう。」とある。これは、飼育、屠殺、漁猟を戒めているだけで、肉食を禁じていないようにもみえるが、「譬喩品（ひゆほん）　第三」には、「いたるところに山の妖精、水の妖精、夜叉、悪鬼が居り、人肉・毒虫などを食らい、もろもろの悪鳥・悪獣は、産んで卵をかえし、乳を飲ませ、おのおの自らかくし護っているが、夜叉は競ってやって来て、争ってこれを食らう。これを食して飽けば、悪心いよいよ高まり、闘争する声は、甚だ怖ろしい。」と比喩によって肉食の恐ろしさを説いている。

このように法華経でも間接的ながら肉食を禁じていると見られるが、「楞伽経（りょうがきょう）」には「禁肉食品（きんにくじきほん）」があり、明確に肉食を禁じている。

篤く仏教、とくに法華経の教えに帰依した賢治は、作品において殺生をしきりに問題にしているが、実生活の上でも殺生を避けて菜食だったのかどうかについて、書簡など賢治の書いたもの、また彼の周辺にいた人々の証言などをもとに考察してみたい。

まず最初にあげるのは、彼が生き物の命を大切にしたという、盛岡中学校時代の同級生の記述である。「四次元」第一六号に載ったK・H生の「思ひ出」によると、一九一一年（明治四四）一〇月一二日の寮での記念祭に部屋を飾るため、同室の者と山へ紅葉した木の枝を取りに行った。そのとき、見事な漆の紅葉を見つけ、「おれは絶対にまけない。」と、切り口から出る汁を顔一面に塗りつけ、皆をびっくりさせた。翌日まっ赤にふくれ上がったひどい顔になって花巻に帰った。家の人たちは驚いて種々の療法を調べ、カニを磨りつぶして塗れば良いと教えられたが、賢治はカニがかわいそうだと聞き入れず、志戸平温泉で療養し、このため中学校を一二日間欠席したという。

賢治が菜食を始めたのは盛岡高等農林学校を卒業する前後であったらしい。賢治の弟の宮沢清六は『兄のトランク』の中で、兄の菜食は大正七年からとしている。そのことは、賢治の書簡からも裏付けられる。賢治は大正七年三月に盛岡高等農林学校を卒業して、研究生になっている。

一九一八年（大正七）五月一九日付の保阪嘉内宛書簡で賢治は

私は春から生物のからだを食ふのをやめました。けれども先日「社会」と「連絡」を「とる」おまじなゐ（ママ）にまぐろのさしみを数切たべました。また茶碗蒸をさじでかきまはしました。食はれるさかながもし私のうしろに居て見てゐたら何と思ふでせうか。「この人は私の唯一の命をすてたそのからだをまづさうに食ってゐる。」「怒りながらら食ってゐる。」「やけくそで食ってゐる。」「私のことを考へてしづかにそのあぶらを舌に味ひながらさかなよおまへもいつか私のつれになって一諸（ママ）にな行かうと祈ってゐる。」「何だ、おらのからだを食ってゐる。」まあさかなによって色々に考へるでせう。（中略）

一切の生あるもの生なきものの始終を審に諦に観察したら何か涙でないものがありませうや。あゝなみだよなみだよ。めゝしくはなくな。おまへの恋人が奪はれ、おまへの名誉が无茶无茶にふみにぢられても男はなくな。おらは泣かない。おらは悲しい一切の生あるものが只今でもその循環小数の輪廻をたち切って輝くそらに飛びたつ道の開かれたこと、そのみちを開いた人の為には泣いたとて尽きない。身を粉にしても何でもない。その人はむかしは私共と同じ力のかなしい生物であった。かなしい生物を自ら感じてゐた。あゝこの人はとうとうはてなき空間のたゞけしの種子ほどのすきまものこさずに身をもって供養した。大聖大慈大悲心、思へば泪もとゞまらず。大慈大悲大恩徳いつの劫にか報ずべき。

と書いている。

ただ、菜食に踏み切ったといっても、「社会と連絡をとる」、すなわち人との社会的な付き合いのためにやむをえず魚や肉を食べることもあったのであろう。ひどくそのことを気にしていることがわかる。それと、「食はれるさかながもし私のうしろで見てゐたら何と思ふでせうか」というあたりは、先に見たの「フランドン農学校の豚」における豚の視点に立った物の見方に通じるものがある。

ところで、「悲しい一切の生あるものが只今でもその循環小数の輪廻をたち切って輝くそらに飛びたつそのみちを開いた人の為には泣いたとて尽きない。身を粉にしても何でもない。その人はむかしは私共と同じ力のかなしい生物であった。かなしい生物を自ら感じてゐた。」とある中の「輪廻をたち切ってかがやくそらに飛びたつそのみちを開いた人」というのは誰を指すのであろうか。釈迦をさすのであろうか。

この手紙の終わりには、

ねがはくはこの功徳をあまねく一切に及ぼして十界百界もろともに仝じく仏道成就せん。一人成仏すれば三千大千世界山川草木虫魚禽獣みなともに成仏だ。

と記されている。これは「一仏成道　観見法界　草木国土　悉皆成仏」という偈などに見られる大乗の思想にもとづいて書いているものと考えられる。このことから考えると、彼の菜食は、盛岡中学校時代から盛岡高等農林学校時代にかけて長期にわたって順教寺の住職の島地大等などから指導を受けて養われた、深い仏教の信仰からくるものであると推察される。

同じ一九一八年一〇月に書いたらしい、保阪嘉内宛書簡では、

私は昆布や豆や米をたべる丈ですから交際費なんかさっぱりからないし、又やがては木の葉でもたべて生きて行ける様に練習して置かないと山の中のことですから凶作に会ったときに困るのでせう。

と書いている。先に見た五月一九日付書簡では人との付き合いのために菜食を破って、肉を食ってしまったことの悔恨を訴えていたが、これを読むと、日常は、やはり菜食を続けていたらしい。

右の二通の保阪嘉内宛書簡を書いた一九一八年（大正七）の一二月、トシが東京で入院したため、賢治は母といっしょに看病のため上京した。一二月三〇日付の、父、宮沢政次郎に宛てた報告の手紙

には、

私共下宿は極めて居心地宜しく大低(ママ)私にも精進物を出し呉れ候。

と見える。下宿に世話になっていても、精進料理を頼んで菜食をつづけたことがわかる。

しかし、菜食をつづけて、肉食をしないでいると体力が落ちることもあったらしい。一九二〇年（大正九）九月四日付の保阪嘉内宛のハガキには、指導教官の関豊太郎教授について大迫付近のタバコ畑を見て歩いたことを知らせた後で、「少々加減が悪くていけませんから今日はこれで失礼いたします。」と書いている。菜食主義を通していたので、この調査旅行においても旅館で出されるものも野菜以外は食べず、調査で歩くと疲れがすぐ出るということがあったらしい。父は自身の健康と出した料理を食べてもらえない旅館の立場を考えるよう注意するが聞き入れなかったという。

菜食のせいか、それとも病気のせいかははっきりしないが、体の調子の良くないことがよくあったらしく、翌、一九二一年（大正一〇）八月一一日付の関徳也宛書簡では、

先日来股引をはいたり蕎麦掻きや麦飯だけを採ったり冬瓜の汁（みんな脚気向きの飯屋にあります）をくったりして今はむくみもなくほんのすこししびれて重い丈で何の事もありません。

と報じている。一年のうちで最も暑い時期に股引をはくというのは脚気のせいでもあろうが、相当に体調をこわしているとしか見えない。

今まで見てきた賢治の書簡などにもあったように、菜食をつづける中でも、人との付き合いや、自身の体力がひどく落ちた時それを回復させるためなどに、時には肉食をすることもあった模様である。森荘已池の『宮沢賢治の肖像』に収められた「座談会・賢治素描」の中で、賢治と花巻農学校時代に親交を結んでいた藤原嘉藤治は、

菜食主義もやったこともあるらしいのですが、先生をしていたころは、肉も食べましたね。

と述べている。

次は賢治が花巻農学校を退職して、羅須地人協会を開設したころのことと思われる回想である。関登久也の『宮沢賢治物語』に収められた「沢里武治氏から聞いた話」において「農学校の教え子で、協会にも加わっていた沢里武治は

花巻町の仲小路に精養軒と言うレストランがありました。石造りの大きな建物で、精養軒の主人は名うての料理人だと言うので評判でした。（中略）

その料理店へ二度三度ならずつれてゆかれたことがあります。理由は、西洋料理の食べ方を教えようというのでした。いつもその度ごとに御散財をかけたことも思い出されます。先生は何でも食物をおいしそうに食べられる方で、こちらまでおいしく頂いてしまうような食べ方をなさいました。骨のついた鶏の料理などは、ナイフとフォークではなかなか食べきれないので、料理の皿をカタカタ音をたてていると、それは骨のところを押さえてこうして食べるのだと教えられました。

と述べている。

しかし、同じ羅須地人協会時代を回想したものの中には、次のようなものもある。雑誌「イーハトーヴォ」の復刊二号に載った千葉恭の「羅須地人協会時代の賢治」という回想は、賢治が花巻農学校を退職して、独居自炊で開墾生活を始めた一九二六年（大正一五）頃のことを、

ひとりの自炊生活が困難となってきたのでしょう。『君も来ないか』という誘いがまいり、それからいっしょに自炊生活をはじめたが、ふたりの生活は実にみじめなものでした。まことに粗食で、毎日その日食うだけの米を買いにやらされ、米のないときは「これでもたべましょう」といって、畑からとってきたトマトを五つ六つ食べて腹の足しにしました。

と記している。

森荘已池の『宮沢賢治の肖像』に収められた「或る対談」を見ると、話し手で、花巻農学校で同僚であった堀籠文之進は、羅須地人協会時代のこととして、「夏のころ桜にいったらあぶらあげを焼いたものとトマトで御馳走になりました。」と言い、森荘已池は、同じく同僚であった白藤慈秀の「お皿には、チサにソースをかけたものがあるっきり、みそ汁は、完全カガミ汁、何も入っていないものでした。」という言葉を紹介している。

このように見てくると、賢治は菜食を必ずしも厳重に守ったわけではなく、時には付き合いのために、時には教え子に感謝の気持を表わすために、また時には自身の体力を回復させるために、肉や魚をたべたこともあったにはあった。しかし、賢治は大正七年ごろからずっと菜食をつづけていたらしいことがわかる。

第四節　結び

この稿の第一節で彼の童話作品の中から生物が他を殺して食って生きることを罪とする罪業意識のうかがえるものとして見てきた作品を、年代順に並べてみると次のようになる。それぞれの作品を考察したときに述べたように、執筆の時期がそれほど明らかでないものもあるし、同じ作品でも初期形、改訂形などと書き直されている場合があるので必ずしも厳密なものとはいえないが、大体の制作の時期を知るめやすとして示すと次のようになる。

「よだかの星」　一九二一年　大正一〇年
「注文の多い料理店」　一九二二年　大正一〇年
「雁の童子」　一九二三年　大正一二年
「二十六夜」　一九二六年　昭和　元年
「フランドン農学校の豚」　一九二七年　昭和　二年
「なめとこ山の熊」　一九二七年　昭和　二年
「ビヂテリアン大祭」　一九二八年　昭和　三年
「銀河鉄道の夜」（「サソリの話」）　一九三一年　昭和　六年

賢治が仏教、とくの日蓮に深く帰依し、菜食に踏み切ったのが大正七年（一九一八）ごろであり、同一〇年には無断で家出をして国柱会に入った。そこで高知尾智耀から自分の得意とする文芸によって大乗仏教を広めるように勧められたことがきっかけとなって、彼は猛然と童話の制作に励んだ。そして昭和八年（一九三三）に三七歳で世を去ったのであったが、それと右の表に示した殺生の問題を扱った作品の制作の時期とを照らし合わせてみると、その制作が、法華経信仰を深めて、高知尾の勧めで童話の創作にいそしむようになった大正一〇年（一九二一）から最晩年にわたっていることがわかる。これらの作品は、いずれも彼が深い信仰にもとづいて、殺生を十戒の第一に置く仏教の教えによって書いた宗教的な作品なのである。